

第1回

ラパス／ボリビア

摂取できる酸素の量も “ふところ”次第

リクルート＝スタディサブリ講師 村山秀太郎

世界最高地点にある空港

2006年私はボリビアを旅した。否、旅するはずだった。ラパス在住のJICAの友人に「ぜひ」と言われ、軽い腰を上げ成田からまずシカゴ空港へ。乗り換え時に飲んだビールがあまりに美味で



おかわり、次なる搭乗がオーバーブッキングでファーストクラスになり、そこで供される高級シャンパンが輪をかけて美味。ご機嫌でマイアミからは再びエコノミークラスに揺られ、ボリビアはラパスのエル＝アルト空港、標高4100メートル世界最高地点にある空港に着陸した。ビジネスクラスのキャビンを抜けるあたりで、はや希薄な空気に気付くも時すでに遅く、頭痛と吐き気に襲われ、バゲージクレームではかが



山あいの街ラパス

みこんで荷物を待つことに。迎えの友人の車の中に倒れこんだ。

友人の住むマンションは3700メートル富士山の頂上地点なのだから、2日間寝ていても一向に快方に向かわない。耐えきれず病院行き。ひたすらココ茶を飲み点滴を打ち、24時間後に無事退院とはなったのだが、基本頭痛と吐き気は治まらない。医師と友人が協議し、レンタル酸素ボンベの世話になってのボリビア紀行となった。



酸素ボンベの世話に(筆者)

翌日、インカ帝国の前身ティワナク遺跡を見物に。そこでは直前に、先住民出身初のボリビア大統領となったモラレスの就任式が行われていた。記念すべき遺跡見学となったが、いまいちテンションが上がらず。ランチに神秘的湖チチカカの焼き魚を食すという稀なる体験をしたのだが、ビールの誘惑に負けて頭痛を再発。「これは最高に良い思い出なんだぞ」と言い聞かせながらの日帰りの旅となった。

初代大統領は南米独立の英雄

基本的に不快に過ぎ行く時間の中で、いくつかの爽快なシーンもまぶたに残る。その最たるものがラパスの夜景。アンデス山系の山あいの街ラパスを4100メートル地点から見下ろす光